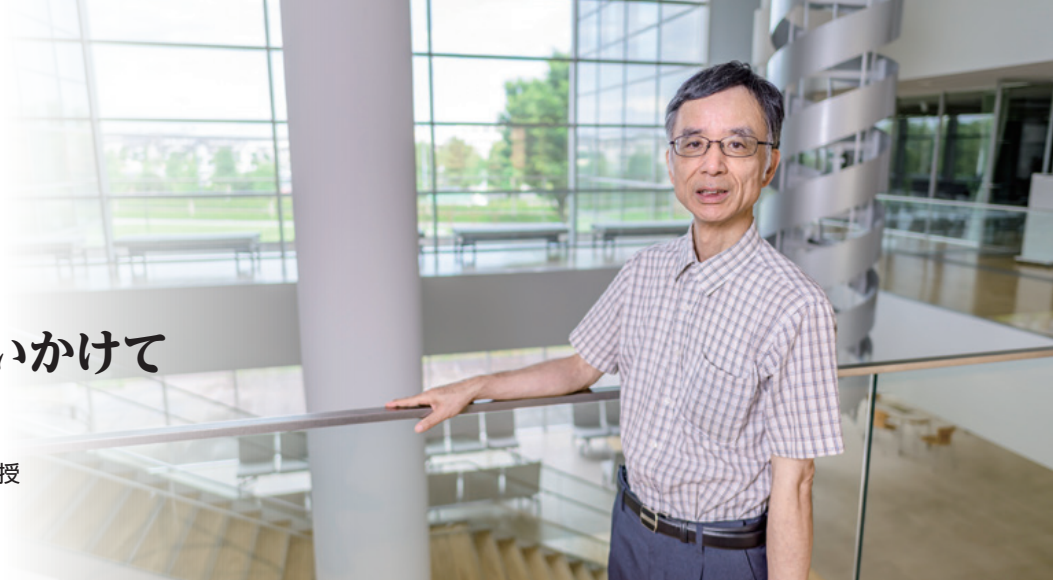
インタビュー



ことばの変化を追いかけて

新野直哉　国立国語研究所 研究系 教授

――国語研ウェブサイト「ことば研究館」の「ことばの疑問」で、「役不足」「名前負け」について執筆されています。どのような研究をされているのでしょうか。

「誤用」や新語など、近現代の日本語に見られる意味や用法の変化を中心に研究しています。「役不足」「名前負け」は、「誤用」として話題となることばの代表例です。ほかにも「煮詰まる」「気がおけない」「世間ずれ」などを研究対象としてきました。

――対象のことばをどのように選び、研究を進めるのですか。

文化庁が毎年発表している「国語に関する世論調査」を参考にすることもあります。それは話題になっている事例が中心です。新聞や雑誌、普段の生活で気になったことばをメモしておき、そこから選ぶこともあります。対象が決まったら、まず用例を集めます。次に、それぞれがどのような意味で使われているかを判断し、意味ごとの割合や年ごとの推移などを分析します。

用例の集め方は大きく変わりました。私の若いころは、新聞を1年分調べようとしたら、自分で読まなければならず大変でした。今は、各社が記事データベースを整備しているので、検索すれば一瞬で用例が集められます。その分、分析や考察に充てられる時間が増えました。これは大きなメリットです。

――記事データベースを使うことによるデメリットはありますか。

広告にも興味深い用例がありますが、記事データベースには収録されていません。また、新聞や雑誌を実際に読んで用例を集めていると、別のことばの使い方が目に留まり新しい研究につながることもありますが、データベース検索ではそうした出会いは起こりにくくなります。そこで、紙面も組み合わせて使っています。

情緒的な話ですが、昔は用例集めに苦労した分、一つ一つに思い入れがありました。30年以上前に食堂に置いてあった雑誌で見つけた用例をメモした箸袋を見ると、その時のことを思い出します。データベースで集めた用例にはそういう思い入れは生まれません。またデメリットではありませんが、データベースでは同じことばを同じ方法で検索すれば誰もが同じ結果を得られます。だからこそ分析では、どこに関心を持つかが昔より重要になります。

――ご自身は、どのような点に関心をお持ちなのですか。

ことばの意味や用法の変化に加え、そうした変化を同時代の人々がどう受け止めているのかという「意識」に関心があります。私が一番長く研究している「全然」が肯定を伴う用法についていうと、平成期の読売新聞では、2003（平成15）年までは容認しない記事、2004～2008年は容認しない記事と容認に傾いた記事の両方が載っていましたが、2008（平成20）年を最後に「全然」の用法に関する記事自体が載らなくなりました。これは、この語に関する人々の意識が変わっていった結果ではないかと考えています。

――最近気になっていることばはありますか。

それは企業秘密なのですが……。一つ挙げると「詰む」です。将棋用語の「詰む」が、「もうどうにもならなくなる」という意味の若者ことばとして使われ、新聞の政治記事でも見られるようになりました。「成金」「高飛車」など将棋用語から一般化したことばはほかにもありますが、「詰む」がなぜ若い人に使われるようになり、どう広まったのかを調べてみたいです。

――私たちは普段、「誤用」に気を付けたほうがよいのでしょうか。

とかく、自分が使わないことば、なじみのないことば、好きでないことばを「間違ったことば」「悪いことば」と言ってしまいがちですが、そのように決め付けないことが大事なのだと思います。用例を集め、どう変化してきたかを分析して示す。それが研究者の務めです。その変化が良いか悪いかは、それを見た人がそれぞれ判断すればよいというのが、私の考え方です。

――なぜ、ことばの変化を研究テーマに選んだのですか。

40年近く前、ある地方大学の教員として本格的な研究者生活を始めました。国語研のようには研究資料がそろっておらず、インターネットで資料を見られる時代でもありませんでした。新聞や雑誌から用例を探して分析する研究ならば、その環境でもできると考えたのです。環境が違えば別の研究をしていたかもしれません。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

「気がおけない」は本来「気配りや遠慮をしなくてよい」という意味ですが、「油断できない」という意味で使われる例もあります。後者の意味での初出は、私の2020年の著書では1937（昭和12）年としています。その後、全文検索できる資料が大幅に増えている「国立国会図書館デジタルコレクション」で調べ直すと、1906（明治39）年の用例が見つかりました。近年は資料のデジタル化が進められているので、次々と新しいことがわかってくるでしょう。これからも、ことばの変化を追い続けたいと思っています。